



## 道南サイクリング(2)

---

### 道南サイクリング（2）

#### 白老温泉

登別市街に入ると海岸沿いにマリンパークというものがあり、立派なお城のような建物がいくつも連なっていた。平成2年にできたばかりのもので外観はディズニーランドを凌ぐほどのものであった。さらに進んで行くと沿道に毛がに屋があったのでそこに立ち寄り、特許部の同僚金君から頼まれていた2匹の毛がにを買って航空便で送ってもらう手配をした。明朝手頃なのをゆでて航空便で送ってくれるということだった。生きたまま送る方式もあるが、一般の人はゆで方で失敗することが多いのでゆでたのを送るほうが良いということだった。それに生きたまま送ると毛がにもいろんな排泄物を出すであろうから、せつかくのうまいみそが減るといった意見もある。

さてぼくらは大昭和製紙の手前で、白老温泉保養センターの看板を見つけたのでここで左折した。そこは北吉原という駅の近くで、白老駅はあと2駅ばかり先にあった。このあたり一帯を白老臨海温泉というらしい。保養センターに着くと5時からならもっと安くなるということで、あと30分くらいあったのでそれまで野営地を探すことにした。しばらく走ったが適当な所がなく、ゲートボール場に入って、焚火などはしないのだがここでテントを張ってさしつかえないかとプレーをしていた初老の人たちに尋ねると、よいということで、さらにある婦人が、「あのプレハブの休憩所でよければその中で泊まってもいいよ」と言ってくれた。彼らは人を見たのだ。ぼくらは数日間のキャンピング及びサイクリングの荒旅で身なりがきれいというわけにはいかなかったが、話し方が礼儀正しくどことなく気品があり、特にジャックは人なつっこいのですぐに信用されたのだ。こうして彼らは自分たちの大事な社交の場、プレハブ造りのゲートボール休憩所を快く開けてくれ、ぼくらはここで優雅な一夜を過ごすことになった。それはぼくらにとって二重の幸運だった。なぜなら翌朝かなりの雨が降ったのだ。

さて荷物を休憩所の中に置いて身軽になると、ぼくらはくだんの温泉保養センターに行き、温泉に入った。湯質はラジウムと珍しいクロレラだった（こうした詳細な記述ができるのはずっと前に書き上げられたジャックの旅行記のお陰である）。ぼくは壁に書かれてあった風呂の入り方に従って、湯舟と水風呂を交互に入るのを繰り返した。ここのセンターの主人があらかじめ二階の部屋で休んでいっていいよと言ってくれたので、湯から上がるとその部屋へ行ってくつろいだ。テレビをつけると甲子園の高校野球の試合をやっていた。この保養センターは小さな店と一体になっており、湯客はここで買物をする。ぼくはビールやつまみを買いに階下のこの店に行った。二人からはそれぞれ希望のブランドのビール

を頼まれていたが、そこに北海道限定販売の「CLASSIC」をみつけたので迷わずこれを3缶買った。3人とも一口飲んでうまいと言った。しかしこれは多くの場合、その日最初のビールを飲むときの口癖になっている場合が多い。ただぼくはうまいと思ったので、その後も北海道では「CLASSIC」を愛飲した。

北海道限定販売のビールとしてはこの他に「白夜物語」というものもある。特許部の同僚木山嬢から買ってくるように頼まれていたので、自転車での最後の訪問地、余市でこれらを一本ずつ買った。しかし汽車などで揺れたので、東京に持ち帰って飲んであのうまさが残されていたかどうか不安である。このような北海道でしか得られないものは北海道セールスマンにとって格好の小道具となる。しかし彼らを知らない人も多いだろう。ぼくのまわりにも北海道セールスマンが多くいる。彼らはたいていは北海道出身者であり、たまに郷土を捨てて北海道に献身する者がいる。彼らの使命はできるだけ多くの人をたぶらかせて北海道に行かせることである。そして道内では彼らの仲間が手ぐすねを引いて、北海道入りする人々を待ち受けていて、彼らにお金を使い果させたあげくに北海道マニアにさせるのである。北海道セールスマンは実に巧妙だから気をつけねばならない。彼らは北海道がまるでこの世のユートピアであるかのように信じ込ませる。なんと多くの若者たちが、こちらでのちゃんとした職を捨てて北海道に渡り、洗脳された結果、自分たちは自由人だと信じ込まされ、実は奴隷のような労働生活をしいられていることか。彼らの多くは牧場に行かされ、牛馬の糞にまみれて牛馬のように働いている。

しかし話を元に戻そう。話題が「CLASSIC」や「白夜物語」に触れると北海道セールスマンは言うであろう：北海道限定販売の「CLASSIC」と「白夜物語」は、北海道内で味わってみて初めてうまいのです。「CLASSIC」の高貴な味わいは汽車が海底トンネルを通るときの震動でこわされてしまい、「白夜物語」の女性的まるやかさは飛行機が上空で揺れるときに消散してしまうのですと。嘘だと思えば料金こちら持ちで航空便で取り寄せてあげますから本州で一度これらを飲んで、できるだけ早く、その味を忘れないうちに北海道に行ってまた同じものを飲んでみるとよい、必ず味が違いますから。とこう言うわけだ。熟練した北海道セールスマンなら、ここでさらに「べつにクラシックや白夜物語が本州のどのビールよりもうまいと言っているわけじゃありませんよ。ただ北海道でしかうまさのわからないビールが確かにありますよと言っているだけなんです」と付け加えるだろう。ぼくは「CLASSIC」にしる「白夜物語」にしる本州で飲んだことはないので定かなことは言えないが、ビールはビール工場から出荷される前に飲んだら一番おいしいというのは最近体験したビール工場見学の際に実感した。やはり輸送中の震動はビールの味を貧弱にするものらしい。ぼくは白老の温泉保養センターで飲んだ「CLASSIC」は確かにその名に恥じない深みがあり且つ清楚な味であったように記憶している。

さて湯上がりのビールや焼酎ですっかりご機嫌になったぼくらは、ここで夕食も食べようということになり、刀根君が注文のため下りていったが残念ながら料理人がもう帰ってしまっていたので食事はでき

ないということだった。そこでぼくらはそこから自転車に再び乗り、海岸沿いの国道に出てしばらく走ったのち焼き肉屋に入った。一通りのものを注文し、箸で肉をつつきながら愉快地それまでの行程を振り返ってみた。食後、食糧等を補給するため隣のスーパーに入った。ぼくらは楽しく買物をする。ジャックはバーボンを忘れずに買った。サイクリングツアー中の買物はいつも楽しい。そしてこのような愉快な気持ちになったときにぼくらは考える： ぜいたくは言わない、社会的地位などももういらぬ、毎日暖かい布団で寝れなくともいい、雨露をしのげればそれでいい、日々のパンと温泉と適度の酒そして北海道の大自然があればもういい、このままいつまでもサイクリングツアーを続けることが許されるならなんと幸せだろう・・・と。しかしそれは北海道の冬を知らないキリギリス人間の発想だ。北海道の夏しか知らないぼくらは北海道の本当の自然を知らない。夏の北海道は北海道が昼寝をしているときの姿だ。本当に北海道が活動するとき、ぼくらのようなキリギリス人間はひとたまりもなく雪の中に葬られてしまうだろう。ぼくらは北海道のお客さんでしかありえないのだ。ぼくらはやはり東京のど真ん中で背広を着てネクタイをしめて活動するしかないのだ。それでも北海道の黄金の回想はぼくらがいつも豊かな希望を持つことを許してくれるだろう。

ぼくらは意気揚々とゲートボール場に戻り、絨毯の上に並んで寝た。未明に雨が降りだし、雨滴がトタンの屋根を打つ音で目が覚めた。しかし何の心配もする必要がない。朝になればやんでくれるだろう。ぼくは再び目を閉じる。そして考える。ぼくらがやがて年老いていよいよ自転車を離れゲートボール仲間となっていっしょにプレーするとき、ぼくらはいつもこのゲートボール場のことを思い出すだろう。そして近くをツアーサイクリストが通るならボールを打つ手を少し休めて、宿の予定がないならこのプレハブの中に泊まっていかんかと声を掛けてみるだろう。しかしカニ族がいなくなってしまったように、ツアーサイクリストもいずれはいなくなってしまうのだろうか。もしかしてぼくらはもう絶滅寸前の希少な人種になりつつあるのだろうか。

朝、雨はまだ降り続いていた。やみそうな様子はない。ぼくらはわずかの望みを持ちつつ朝食の用意をした。朝食が終わる頃には雨も上がるだろう。ジャガイモを煮たがこれは煮えるまで時間がかかり燃料を食う。サイクリング中の料理は、穀類は米などの小粒のものを料理するほうが合理的だ。今回2度料理したそうめん（あるいは冷麦）は成功だった。燃料はそんなに食わなかったし失敗することもまずない。これからも夏のツアーには一つのヴァリエーションとして愛食しよう。

苦小牧

その朝、今回初めて雨具で出発した。気温がそれほど低くなければ、ぼくは雨の中の走りがきらいで

ない。とくに雨の中を走っているうちに雨が上がり、青空が顔を出す、この時の景色はどこを走っていても美しいものだ。知床、宗谷岬、これらはぼくは雨の中を走っていて、やがて雨が上がるとともに到着した。雨上りの時空気は一番透明度が高くなっているに違いない。景色が輝きを増して迫ってくる。雨に濡れながら走るのが平気かどうか、これがサイクリストとして大成するか否かの別れ道になろう。もちろん雨にずぶ濡れになるのが好きだという人はおかしい。ぼくが言うのは雨に濡れても自慢のくふうを凝らした雨具や防水仕掛けがしっかりしているので、へっちゃらだ、いくらでも降れ降れ、という雨をものもしない精神を持っているかどうかだ。こうして雨の中を走り、駅などの目的地について雨具を脱ぐとき、ぼくは一種の達成感を味わう。そして駅で、ここからは輪行しようか、もっと雨の止むのをじっとして待っていようかと迷っていると、どこから来るのかこういうときでしか出会わない、まるで雨の時にこそ自転車は乗るものだと言わんばかりの完全装備のサイクリストが到着する。一点のすきもない防水装備だ。彼らの特徴は、ぼくらならここから輪行するか雨足の弱まるのを待って出発するのだが、彼らはレインフードもそのままに一休みすると（多くの場合はたばこを一本うまそうに吸うと）、激しい雨の中に再び消えてゆく。ぼくは折りを見計らって近づき声を掛ける。ぼくらは互いの労をねぎらう。彼は雨具に相当の工夫を施すので、彼らの服装、それに荷物の防水の方法を見、またアドバイスを聞くのはいつも有益だ。しかしいくら打ち解けあい仲良くなったからといって、そこから彼らと一っしょに行くのはよしたほうがいい。彼らはたいていの場合、河童だ。

ぼくとジャックは苫小牧までレインランをした。刀根君はJRで輪行して一足先に苫小牧駅に着いた。そして彼は、ここで寝台特急北斗号の指定券を三枚確保したのだ。こういった刀根君の才能には驚かされる。出発の朝、ひかり号に乗り遅れても、迷わず羽田に向かい飛行機の座席を確保したことや、今回の寝台特急指定券の確保といいその機転の速さには敬服する。これらの券はぼくらはもう全部売り切れていて、キャンセル待ちでもたくさんの方が待っているということだったので、完全にあきらめ、すでにそれらのことは脳裏から消散していた。しかし刀根君はこれらの指定は直前になるとキャンセルが開始、そのころにはキャンセル待ちの人たちもあきらめて待ち状態を解除するものであることを知っており、絶妙のタイミングを見計らってこれらを確保するのだ。刀根君よ、君の才能はすばらしい。お陰でぼくらは、北斗のもとで夢を見ながら北海道を去ることができた。北海道での疲れもすべて北斗の中でとれた。疲れを残さないで東京に帰って帰ることができた。

サイクリングツアーの帰りは寝台列車のほうが飛行機よりもいいかもしれない。飛行機でならあっという間に羽田に着くので、その数時間前はまだ自転車をこいで走っていたわけだ。出発より1時間以上も早くチェックインせねばならないので、丘を越え、長いエアポート道路を最後の力を振り絞って疾走せねばならない。そして急に冷房のききすぎた機内に入って身体を冷やす。だから羽田についてタラップを下りるときはまだ体力が回復しておらず身体はぐったりしている。だから手荷物受け取り所ですっすり重い輪行袋入りの自転車を受け取ると、足がふらつきモノレール駅に行くのが億劫になる。そこでついタクシーで帰りたくなるので費用が嵩む。これに比して寝台特急北斗号はいたれりつくせりだ。まず出発の1時間前に駅に入る必要はない。指定券があるので並ぶ必要もなく、自転車を分解して輪行袋に

詰める時間を考慮したとしても20分前に駅に来ることができれば上出来だ。しかも飛行機と違い、少々風がきついても欠航というようなことはない。また墜落することもない。さらに寝台車に乗り込めば、愛車である自転車を自分のそばに置くことができる。航空社の手荒な作業員に放り投げられたり踏みつけられたりする心配はない。どんな重い物を愛車の上に載せられるかなどと不安がる必要はない。一緒に北海道を走った愛車と最後の夜を共に過ごすことができる。しかしやはり決定的なことは、北斗は夢を見させてくれるが、飛行機では夢はおろか旅の後の余韻をゆっくり楽しむことさえできないことだ。ぼくは北海道からの帰路は、車中で毛がにを丹念に食べながら旅の余韻を隅々まで味わうのを楽しみにしている。黄金の回想の始まりだ。しかし飛行機の中では毛がにをカリカリと食べるのははばかられる。北海道からの帰路はやはり寝台列車に限る。刀根君のお手柄は今回のぼくらの北海道旅行の成功にとってなくてはならないフィニシングタッチであった。

## 支笏湖

苫小牧駅に着いたのは昼前だった。雨はずっと降り続けている。しかし苫小牧で雨が止むのを待つのは苦痛だった。ぼくはひとりでもいいから支笏湖に行こうと決心した。ぼくの一匹狼の本性がそう決断させた。地図にある支笏湖の温泉マークがぼくを引き付ける。サイクリストにとっては温泉はオアシスのようなものだ。少々険しい道もその先に温泉があればサイクリストはかまわず進んで行く。ぼくは他の旅行記で、一日中働き続けるサイクリストの肉体にとって温泉は最高のお駄賃だと書いた。良いサイクリストはだから自分の肉体を慰労するためにそれぞれの日程の最後に温泉地を選ぶ。悪いサイクリストは歓楽地を選びさらに肉体を酷使し疲労させる。しかしたいてい温泉地と歓楽地は一体になっているので良いサイクリストと悪いサイクリストを見極めるのは難しい。一つのヒントは翌朝出発する時間である。

その朝の白老温泉でもそうであったが、ぼくらはたいてい朝の出発時間は7時前後だった。ぼくはふう4時半には目が覚め、テントのチャックを開いて空模様を見る。ジャックも5時にはテントから顔をのぞかせた。刀根君はほおっておけば9時くらいまで寝るのであるが、朝食の匂いにつられて6時には蓑虫テントから這い出してきた。ぼくはサイクリングなどの自力で進む旅においてはスケジュールを時計座標よりも太陽座標に合わせて組み立てるべきだと考える。したがって太陽とともに起き、太陽とともに沈むべきである。夏の4時半の起床は決して異常ではないのだ。一日のうちで最も美しい瞬間を目撃することができるのも早起きサイクリストだ。こうして日照時間をくまなく利用できるサイクリストは他のサイクリストよりも長いライドを楽しむことができ、牧神の午後には多くの動物と同じように優雅なシエスタを楽しみ、やがて一日の活動の後に夕陽を浴びて眠気をもよおし、黄金の眠りを享受する

。結局ぼくらは3人とも支笏湖に行くことになった。現役のラグビー選手であるジャックは、雨だからよす、というのはラグビーとしてのプライドが許さなかったのかもしれない。刀根君もマラソンランナーだ。雨の中のほうが快走できるはずだ。幸い雨は小降りになってきていた。支笏湖までの長いサイクリング道路は樽前国道に沿って延びており、かなり緩い勾配が続くだけで、思っていたより楽な行程だった。しばらく行くと雨も上がり、湖に近づくと晴れ間も見えてきた。案の定、刀根君がトップで支笏湖に着いた。早過ぎて、行き過ぎたのでまたぼくらとはぐれてしまった。ぼくらが再会するまでに刀根君がとったという道筋はいささか謎めいている。刀根君の説明で一応のことはわかったが、ぼくらの目的地だった、モーラップキャンプ場に彼が現われた方角は彼の説明する道筋とは反対である。この詳細はジャックの旅行記にゆずろう。

ぼくらはモーラップキャンプ場には温泉がなかったので、そこを去り、途中支笏湖温泉で買物をし、さらにモーラップの対岸の丸駒・伊藤温泉を目指した。伊藤温泉でやっと今回初の露天風呂につかることができた。この風呂は湖と岩の堰を隔てて接しており、低い岩の堰を越えれば湖でひと泳ぎすることができる。しかし注意書きがあり、「危険が伴いますので泳がないでください」とあった。湯につかりながら湖の向う側の風不死岳、樽前山、多峰古峰山などを眺めていると次第に雲が消散してゆき青空が接近してくるようだった。

ぼくらは、湖岸の幌美内キャンプ場で野営した。ここでは刀根君も細い竹を使ってなんとかテントを立体化できたので快適な睡眠をとることができたろう。そのためか彼はこの夜のジャックのセレナーデを聞くことができなかった。そのジャックはシュラフを前日の雨で濡らせてしまっていたのでつらい夜を過ごしたということだった。ここの売店で買って翌朝料理して食ったわさびそばは特においしかった。そのぴりりとするそば湯もおいしかった。ぼくは残ったそば湯を最後の一滴まで飲んだ。

支笏湖からは刀根君にプランの作成を任せるところ札幌よりもニセコに行くことを望んだので湖西に流れ込む美笛（びふえ）川沿いに湖を出ることになった。丸駒温泉から先は湖岸沿いに道がないので恵庭山の後肩を通して美笛に向かう。かなりきつい登りを余儀なくされた。札幌方面へ分岐するオコタン分岐点の近くで荷物を持たないマウンテンバイクライダーたちとすれ違った。手を振ると少しまごついたふうだったが彼らも手を振って返礼した。あとでわかったことだが、彼らはヒルクライムレースの最中であつた。この三叉路で休憩していると5・6人の高校生らしい男性ライダーたちに追い付かれた。彼らはまとまって来たのではない。脚力に等差数列的差があるらしく3・4分の等間隔の差をもってひと

りずつ順に坂を上がってきた。先頭で来た若者と写真に納まったが、彼は神戸から来たということだった。

そこからぼくは先頭で出発し、小さな峠を登り切ってレーズンクラッカー等を食べながら休んでいると、くだんの高校生たちがまた等差間隔で登ってきて「お先に失礼します」とひとりずつ礼儀正しく追い越して坂を下っていった。そのうちジャックと刀根君が来たのでぼくらは坂を気持ちよく下った。ほどなくぼくらはオコタンペ湖の展望所に着いた。

今回の旅でさまざまな美しい湖を見たが、高貴さの点ではオコタンペ湖が一番だった。したがって最も美しい湖だった。それは水がきれいだとか（たしかに湖面がエメラルド色をしていて美しいが）、中にしゃれた島が浮いているとか、周囲の地形が壮観だとか、まわりの森とのコントラストがすばらしいとか、そういったことが決め手になったのではなかった。オコタンペ湖が他を凌ぐ高貴な美しさを有する理由は、思うに湖面全体を見渡すことができないことにあるらしかった。ぼくらは湖面から30メートルくらい高いところにある道路沿いの展望所からこの湖を垣間見ることができるのであって、視界の多くはまわりの森や林でさえぎられ、かろうじて向う岸の一部を含む一切れの湖面を見ることが許されるのみである。湖岸も凹凸がありオコタンペはすべてを見せてはくれない。美しさの秘密はその一部が隠されたままであることにあるらしい。ジャックがその旅行記に記しているように、この湖は人を拒もうとしているかのようだ。しかし同時にその一部は我々の目にさらして我々の心を引こうともしているのだ。その妖しい意志の存在の直感に湖の精の存在を予感させる。その精の存在を確かめてみたくなる。それはあこがれであり好奇心だ。そしてあこがれと好奇心を高めるものほど美しい印象を与える。

その展望所からしばらく下って行くと、橋があり、そのほとりに等差数列の高校生たちの自転車が停められていた。しかし彼らの姿は見えない。橋の下をのぞいてみたがいなかった。何かこの辺に見逃してはならない名所があるのだろうかと思いつき芋菓子を食べながらぼくらは辺りの様子をうかがってみたが、立て札のようなものもなかった。しかしあとで地図を見て彼らの行った所がわかった。その橋の下を流れる川はオコタンペ川でオコタンペ湖の水はこの川を伝って支笏湖へ流れ入る。してみればかの高校生たちはオコタンペ川を沢伝いに歩いて登り、秘境オコタンペ湖を目指したに違いなかった。若きサイクリストたちよ、君らはそんなにまでしてすべてを見たいのか。ぼくは美しさの秘密の一部が隠されていることにあると言った。しかし美しさの秘密が隠されたところにあるとは言っていない。君らはオコタンペ湖から溢れくる水の流れを頼りにその流れの源を確かめてみようとした。君らは最も美しいものはいつも隠されていると信じていたかもしれない。しかし君らはオコタンペのすべてを見ることはできまい。湖岸にたどり着いたとき、君らはまだ隠された岸辺のあることを知るだろう。オコタンペ湖岸のどこに立っても同じことだ。湖の真ん中に行くのでなければすべては展開しないだろう。え、小さな湖だから泳いでいってみようか？しかしそれはオコタンペの湖精の思う壺だ。



恵庭岳の肩を伝って流れ下りるオコタンペ川に沿って下り再び支笏湖の岸边にたどり着いた。この頃のぼくらの唯一の望みはどんな食堂でもいいから早くたどりついてカレーライスを食べたいということだった。朝誰かが、しばらくカレーを食ってねーな、と言ったのが引き金となった。したがって、オコタンキャンプ場の看板を見つけると、少々遠回りすることになるが、しばらくダート道を走ってこのキャンプ場に行ってみた。しかしカレーライスは、いや食堂はないということだったので、ぼくらはダート道を引き返した。ぼくらはカレーを食べたいという一心でペダルをこいだ。ダートの部分が幾箇所もありロードレーサーの刀根君はパンクが心配でつらい思いをしたろう。しかし幸い今回のツアーを通してだれも一度もパンクで足止めをくうことはなかった。

やがて美笛川に着くと川沿いに登りが始まった。しばらく登ったところにドラブイン美笛なるレストランがあったので、ここで昼食を食べた。みんな同じものを注文した。カツ入りのやつだ。そして水を何度もお替わりして汗で失った水分を補給した。

そこから先に驚くほど長いトンネルをいくつかくぐらされた。長いトンネルは度胸がつく。後から物凄い反響とともに近づいてくるダンプカーなどを平気なふうをしてやり過ごすのだから、度胸がつく。肝っ玉の小さいサイクリストならつい振り向いてしまう。しかし振り向いてはいけないのだ。その瞬間にバランスを崩す危険性がある。真っすぐ前を見て真っすぐに進まねばならない。新しいトンネルなら自転車用に十分なスペースを左右にとってあるが、積丹半島の海岸沿いにあつたいくつものトンネルはほとんどが自転車用のスペースがないにも等しいくらい狭いので、後から何台も大型車が続いてくると拷問を受けているようなものだった。

## 羊蹄山

北海道特有のはるか先まで真っすぐに延びる道が現われると、逃げ水現象が見られた。これを写真におさめようとする時に限って、車の列が続き撮影の邪魔をする。結局一枚も撮れなかった。やはり逃げ水は捕らえることができないのだ。ある長いトンネルを出たところに公衆電話があつたので刀根君は会社の特許部に電話を試してみた。ぼくには何も急用が入っているようではなかったので安心した。急用が入っていたとしても北海道の山の中でどうすることもできるわけではないが。

特に夏の山道は地面にいろんな昆虫や小動物がいる。多くは車にひかれた死体であるが、中にはこれからひかれるためにわざわざ道の真ん中の方に這って行っているものもある。ぼくはできるだけそれらをひかないようにハンドルをさばくが、ぼくがひかなくともいずれひかれるだろう。虫をよけようとしてそのためにぼくが後から来る車にひかれたのではばからしい。知人で子猫をよけようとして電信柱に車を衝突させたドライバーがいた。ある人が、プラットフォームから落ちた酔っ払いを救おうとして、入線する電車にひかれて死んだという記事が新聞に載っていた。このような事故はやるせない。人のやさしさが自らの不幸を招くのはやるせない。アスファルトの上をうごめく虫たちよ、小動物たちよ、前輪ではひかない、しかし後輪までは面倒が見れないぞ、御免。

山間地を抜けると羊蹄山が目の前に現われた。羊蹄山は今回のツアーのシンボルとあってよかった。初めの日に洞爺湖の展望台に着いたときから羊蹄山はほとんど毎日ぼくらの視界のどこかにあった。平地に下るとまた刀根君が断然トップに出る。そしてぼくはどンドン二人において行かれる。しかもいちど道を間違えて札幌の方に向かってしばらく走ったのでかなり遅れをとってしまった。そのうち雨が降りだし雪なだれ遮道に入って雨宿りをしていると刀根君とジャックが向うから引き返してきた。この雨では、倶知安にたどり着くのはおぼつかない。近くに川上温泉というのがあるからそこまで行こうということに決まった。しかし川上温泉に近づく頃には雨はほとんど上がっていた。これなら倶知安まで行けると、ぼくらは再び計画を変更し、倶知安を目指した。羊蹄山のふもとをかすかなカーブを描いて回る。しかし倶知安まではかなりあった。きれいな円錐形をした羊蹄山はどこで見ても同じ形なのでいくら進んでもその形は変わらず、こちらはいつまでも同じ所において道だけがペダルの下をすべり去っているだけのようで、まるでレコード針にでもなったような心地がする。ようやくふところの深い倶知安の中心地に着いたのは日没より30分くらい前だったろうか。今回で最も長い距離を走った日であった。

ぼくらは羊蹄山のふもとを流れる尻別川の河床に野営することにした。河床といっても岩や石のごろごろしたものではない。立派な運動公園ができておりやわらかい土の上や芝生の上にテントを張った。何を勘違いしたか、みんな今宵が野営をする最後の夜だと思い込んでおり、それでは祝杯だと、銭湯に行った後、気も揚々にスーパーを闊歩し、ジンギスカン鍋のための羊の肉1キロなどのさまざまのご馳走を買い込んだ。フライパンで料理したジンギスカン鍋はうまかった。去年の夏、大坂君と信州サイクリング旅行をしたときの最終野営地でも羊肉をたっぷり買って祝杯を上げたことを思い出しての奮発だった。とにかく本場のジンギスカンはうまかった。もう1キロ買ってても良かったかもしれない。また途中の行程で一度くらい、例えば登別温泉あたりでジンギスカン鍋をやってても良かったかもしれない。

。

ビール等を飲みながら旅を振り返って話をしていると一日だけ日数が合わないということがわかってきた。「あと一泊はどこでしたんだっけ。」「おかしいな。」「最初は洞爺湖、次に登別温泉、次にえいと・・・」「白老だろう。」「次がもうきのうの支笏湖か?」「おかしいな」「酒のせいで頭が混沌としているからだろう。あすになれば思い出すよ。」しかし、ぼくらは時計やカレンダーを見て、やっとぼくらの頭の中の時計が1日ばかり進んでいたことに気づいた。「とするともう一泊どこかでできるわけだ。」「これは1日プレゼントをいただいたようなものだ。」「しかし、じゃあこのジンギスカン鍋はどうなるんだ。最後の祝杯のつもりがそうでなかった。」「これは前夜祭だ。」ぼくらは1日得した気持ちになり、ますます陽気になった。空を見ると羊蹄山の影が薄く闇の中に浮かんでいた。

翌朝、いつものように早起きをすると、今にも雨が落ちてきそうな空模様だった。ぼくはあわててテントから出、荷物を近くの屋根付きの休憩所に移した。地元の人が犬の散歩にやってくる。こういう公園でテントを張ってはいけないのだろうが、彼らは何も言わない。北海道の人はサイクリストには一般に好意を持ってきているのか同情してくれているのか冷たいことは言わない。ある人がぼくに話し掛けてきた。たいてい「どこから来たんですか?」が最初のきっかけになる。ぼくは天候が心配だと言うと、その人はあっさり、きょうは雨は降らない、晴れますよと自信ありげに言った。今にもぼつりぼつりと降ってきそうな空模様の真下である。その日の行程でぼくらは確かに一滴の雨も感じなかった。朝食は昨夜の宴の残り物を平らげた。

ぼくらはスキー場で名高いニセコ連峰を登っていった。スキーのジャンプ台が山麓に見える。この辺りは冬はものすごい人が訪れるのだろう。何度も休憩しながらやっと峠らしいところにたどり着いた。お花畑だ。きれいで冷たい水が流れている。ここをニセコアンヌプリという。しばらく下っていると五色温泉に着いた。古い木造の温泉宿で、かなり大きなものであった。冬には2階までが雪に埋まってしまうらしい。ここでひと風呂浴びる。ぼくはまず千人風呂に入った。湯につかっているとモーターサイクリストたちがやってきた。彼ら同志のこういうときの会話は、バイクのメカに関するものが多い。彼らは走行中は会話ができないので、こういう時に質問やアドバイスをするわけなのだろう。やがてぼくは露天風呂に移った。刀根君とジャックは始めからここに来ていた。この露天風呂ははるか上方の展望台から丸見えであった。刀根君がカメラを持ち込んで露天風呂の記念写真を撮った。

五色温泉からしばらく行くとダートの下りが続き、刀根君はパンクを恐れて押して下った。そしてT字路に出た。ぼくらが行く予定のコースは、右手の岩内の方に抜けるための登りの道だ。左に行けば下って昆布川温泉に通ずる。刀根君はここで自分は左に下ると決断した。ダート道を押して下った後に、もう登りはたくさんだという気持ちになっていたのだろう。そこでぼくらは別れることにした。函館駅から乗る北斗で再会しようということで別れた。刀根君は、その後、昆布川温泉を経て蘭越駅まで行きそこから長万部駅へと輪行した。大沼・小沼公園が彼の目当てでもあった。途中大学生グループと一緒に

なり同行したということだ。

ぼくとジャックは刀根君と別れてからさらに数百メートルの標高差を登って一つ峠を越え、神仙沼で休憩がてら沼を散策したりする。しかしぼくはもう書き過ぎた。刀根君がここであっさり下っていったように、ぼくもここで失礼しようと思う。神仙沼（散策）→岩内（フェリーポートのレストランで昼食）→カブトライン→神恵内村（野営）→当丸峠→古平町→セタカムイライン→余市（ニッカウイスキー工場見学）→（JR輪行）→長万部（乗り替え待ちの間に銭湯に行く）→（JR輪行）→函館（刀根君再会）、とまだまだ書き残した場所、それに関わる思い出はいろいろあるが、もう疲れた。ペースの配分をまちがってしまったようだ。ここでリタイヤだ。実際のサイクリングよりもその旅行記により長い時間を費やすのは本末転倒だし、サイクリングでの疲れよりもその旅行記作成での疲れのほうが大きくなればお笑い草になってしまう。もうおしまいだ。ではみなさんまた一緒に走りましょう。

終わり

P.S.

本稿を作成中に「アナグマ先生南洋従軍記」を読み終え、その次に読んだのが、同行者ジャックの今回の旅の紀行文だった。親子の作品を続けて読ませていただいたわけだ。ジャックはヨーロッパ出張旅行の出発前に完成しようと急いで作成したので、ワープロ原稿特有の荒さが目立つが、コースを間違えず最後までコンスタントなペースでこぎつけているのでゴールできたのだ。これから読むたびに、特にぼくが書けなかった部分を読むたびに、連想による新たな思い出を汲み上げることを可能にしてくれよう。

ジャックは北海道旅行から帰宅してからすぐ、自分と自転車の雄姿を奥さんに見せるとともに写真に撮らせたというのはほほえましい。間もなく、山屋やサイクルショップに出掛けていったというのはぼくと同じだ。しかしエネルギーが余って400ccの献血をしたというのには驚かされた。もう「ジャック」と呼ぶよりは「アナグマ部長」とでも言ったほうがピッタリする。

刀根君は毎日忙しく仕事に追われている。あまり忙しいのか今年は夏のテニス部の合宿に参加しなかった。彼はしかし秋の副社長杯特許部ゴルフコンペに向け練習を開始したようだ。ゴルフ、マラソン、テニス、サイクリングと、彼のスポーツライフはいつもめまぐるしい。

back to 道南サイクリング（前半） <http://p.booklog.jp/book/76500/read>

photos of the author: [amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://www.amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)